

提題

イタリア・ルネサンスのヒューマニズム

近藤 恒一

イタリアのルネサンス・ヒューマニズムは、ほとんどイタリア・ルネサンス全体をおおう広範で持続的な文化運動であった。その推進者ないし担い手はさまざまな分野にみられ、しかも時期により人によってヒューマニズムの基調や思想傾向も異なる。このような事情もあって、これまでのヒューマニズム解釈もまた多様であった。が、私はここでは、ヒューマニズム解釈史には故意に触れない。むしろ私なりのヒューマニズム解釈を一つの仮説として提示することを試みたい。とはいえ、私の仮説もまた先達の研究に多くを負っていることはいうまでもない。

ヒューマニズム運動の核となったのはフマニタス研究 (*studia humanitatis*) であった。そこで私は、このフマニタス研究に焦点を合わせ、ヒューマニズムについての形式的規定を試みることにする。

フマニタス研究について、レオナルド・ブルーニは書いている。「この研究がフマニタス研究とよばれるのは、それが人間を完成し、みがきあげるからである」。

ここには、フマニタス研究の目的と機能が明確に述べられている。フマニタス研究は人間完成を目的としており、またこの目的の達成を可能にする、と考えられているのである。のみならず、この目的達成のうえでそれは他のいかなるものにもまさるといことが示唆され、したがってまたフマニタス研究の自立性が暗示されている。

では人間完成とはどういうことであろうか。ヒューマニストたちがこのことばで考えていたのは、基本的にはつぎのことであるように思われる。すなわち、自然のままの単なる人間、ただ可能的に人間であるにすぎない単なる人間を、現実的に人間であるような人間、全面的に実現された人間にすること。要するに、自然のままの動物的人間を、真に人間的な人間にすること。

このことをよく示しているのはペトルカのことばである。「人間というものは……もしもフマニタス (*humanitas*) をまとい動物性 (*feritas*) をぬぎすてること、

要するに、単なる人間 (homo) から人間としての人間 (vir) になることを学ぶのでなかったら、ただ卑しい醜悪な動物であるばかりか……有害で気まぐれな、不誠実で無節操な、狂暴で残忍な動物でもある」。

このペトルカの記事と、かれの孫弟子で『ペトルカ伝』の著者であるブルーニのあの文章とを重ね合わせてみると、ヒューマニストたちのいわゆる人間完成がいかなる内容のものであるかが明らかになる。

人間がフマニタスをまとい動物性をぬぎすてること。すなわち、人間が自己自身を、自然のままの動物的人間から「人間的な」人間としての「フマニタスの人」へとつくりあげていくこと。これが人間完成の意味であり、これがまたヒューマニズムの基本的発想である。じっさい、このような発想は、人間形成という人間の自己関係についてばかりか、人間の外的自然との関係についてもみられるのである。たとえばジャンノット・マネッティは述べている。「さながら、世界とこれを飾るいっさいのものは、まず全能の神によって人間の使用のために考えつかれ創造され、ついで人間によって感謝の念をもって受けとられ、はるかに美しい、はるかに美しい、はるかに洗練されたものに、しあげられたかのようである」。

このように、自然のままの自然を、より美しい自然につくりあげていくこと。それは自然を「より人間的な」ものにしていくことだともいえよう。自然のままの単なる人間を「人間的な」人間にしていくことと、外的自然を「人間的な」自然にしていくこととは、根底において一つである。「より人間的な」人間のみが、自然をも「より人間的な」自然にしていくことができるのである。

フマニタス研究の目的と機能は「フマニタスの人」を形成することにあつたのであるが、ではフマニタスとは何か。すなわち「人間的」ということの中身は何か。

フマニタスということばは、さまざまな意味に用いられている。が、結論的にいえば、それは動物性と対立するものであって、神性 (divinitas) と対立するものではない。神性はむしろフマニタス完成の方向を示している。フマニタスが質的に高められるにつれて、それはますます神性に似たものとなる、というべきであろう。フマニタスとは、人間が広義の教育によって獲得したもろもろのすぐれた能力や質のすべてであり、人間がそれによって自己の動物性をぬぎすてたり統御したりできるゆえんのもの、人間をすぐれて人間的な人間にするゆえんのもの、である。これ

をかりに教養ということばで言い表わすとすれば、フマニタスとは、すぐれて人間的な教養をいみする。

人間の教養としてのフマニタスは、きわめて広い意味内容をもっている。その内容を分析的に吟味してみると、それは知的教養のほか広義の倫理的教養や美的教養を含み、さらに身体的諸能力の卓越性や熟達性といういみでの〈身体的〉教養までも含みうる。

ここでフマニタスの内容として四種類の教養を考えてみたのは、あくまでも分析的視点からする便宜上のことでしかない。これら教養の諸形態は、じっさいには、さまざまなかたで相互に関連し合っている。知的教養とまったく無関係には倫理的教養も美的教養もありえないし、〈身体的〉教養も多かれ少なかれ他の三者と結びついている。たとえば、いわゆる市民的ヒューマンイズムの理想的人間像としての「良き市民」においては、〈身体的〉教養は倫理的教養の一部をなしていた。また、盛期ルネサンスの宮廷文化を指導したヒューマンイズムにおいては、〈身体的〉教養は美的教養と深く結びついていた。

とにかくルネサンスにおいては、このようにフマニタスは、知的・倫理的・美的・〈身体的〉諸価値を含む包括的概念となり、人間の包括的尺度にまで高められる。そして人間も人間活動も学芸も文化も、すべてフマニタスを尺度として評価されることになる。

ところで、人間が「フマニタスをまとい動物性をぬぎすてること」を可能にするもの、それは一般に「理性と言語」(ratio et verbum)と考えられている。そしてこの二つはいずれも「神の贈りもの」として人間に生得的なものとみなされている。しかしまた他方では、人間形成のための具体的手段として、人間自身がその「理性と言語」を用いて歴史的にうみだしてきた諸学芸(artes)がある。この諸学芸は、人間が「フマニタスをまとう」ための重要不可欠の手段である。したがって諸学芸は、フマニタスをめざし、フマニタスにつかえなければならない。こうしていえば「諸学芸のフマニタスへの還元」という定式がうまれる。そしてあらゆる学芸が、少なくとも理念的には、フマニタスを結び目として関連づけられ、フマニタスのうちに合流せしめられる。この面からすれば、フマニタスは諸学芸の有機的統一体ともみなされうる(チェリオ・カルカニーニ)。

以上の考察から明らかなように、ヒューマンイズムの理想的人間像である「フマニタスの人」は、全人的な普遍的教養のもちぬしであり、いわゆる「普通人」(uomo universale) とかさなりあう。

では、フマニタスの人としての「普通人」は、より具体的には、どのような人間なのか。

それは単に多方面の活動にすぐれた能力を発揮する人のことではない。いわゆる万能人のことではない。いわゆる万能人は、いわば中性的な概念であるが、フマニタスの人としての「普通人」は核心において倫理的である。

どんなに知的教養や美的教養にすぐれた人でも、倫理的教養に欠けるならば、真に人間的とはみなされない。フマニタスの核心は倫理的教養にある。しかしまた、多くの倫理的卓越性をそなえた人でも、けっして「人間的」とはいえないことが少なくない。そのような人間に人間愛が欠けている場合である。人間愛を欠く人は、いかに多く他の倫理的卓越性をそなえていても、非人間的でありうる。してみると、人間愛こそ倫理的教養の核心をなし、したがってまたフマニタスそのものの核心をなしていることになる。人間愛を欠くことは「人間の名と本性を放棄すること」にはかならない(ペトルカ)。フマニタスはその核心においては人間愛と一つなのである。だからこそ「賢者たちは、あらゆる美德のうちであの一つだけを、人間そのものの名によって呼んだ。すなわちフマニタスと呼んだのである」(フィチーノ)。

この人間愛としてのフマニタスは、究極的にはキリスト教的な愛を意味していたが、しかしこれのみに限られるものではなかった。じっさい、ヒューマニストたちは人間愛を表わすのに、*caritas* や *misericordia* ということばとともに、*philanthropia*, *benivolentia*, *amicitia*, *amor* などのことばを用いている。人間愛としてのフマニタスのうちには、キリスト教的な隣人愛とギリシア・ローマ的な人間愛とが合流していたといえよう。

フマニタスの核心が人間愛にあるとすれば、人間愛を欠く人はもはや「人間的」とはいえず、本質的に「非人間的」である。逆に、人間愛さえあれば、人はそれだけですでに「人間的」であり、フマニタスの人でありうる。とはいえ、じっさいには、ヒューマニストたちは人間愛だけでは満足しない。ヒューマンイズムはあくまでも人間的可能性の全面的実現をもとめる。したがってフマニタスは、その理想的な

ありかたとしては、調和のとれた普遍的教養でなければならない。人間愛を核として調和のとれた普遍的教養、これが十全なフマニタスである。真のフマニタスには、ある根底的な調和が不可欠なのである。この調和が破れるとき、フマニタスは、多かれ少なかれ、いびつなありかたをし、人は多かれ少なかれ「非人間的な」ありかたをすることになる。十全なフマニタスの人、これが真に「人間的な」人間なのである。

このような意味で「より人間的な」人間へと自己形成しつつ、人間・社会・世界との「より人間的な」かかわりをつくりあげようとする態度。これがヒューマニズムにほかならない。

ところで、何を「より人間的」とみるか、フマニタスの構成要素のどれに力点をおくかによって、ヒューマニズムは現実には多様な姿をとらざるをえない。じっさい、これまですでに、さまざまな型のルネサンス・ヒューマニズムが指摘されてきた。キリスト教的ヒューマニズム、市民的ヒューマニズム、哲学的ヒューマニズム、文学的ヒューマニズムなど。さらに、美的ヒューマニズムと名づけてよいような文化現象もみられる。ヒューマニズムについての歴史的研究においては、このようなヒューマニズムの多様な諸形態を多様なままに具体的に明らかにすることもたいせつであろう。が、しかしまた、私がここで試みたように、ヒューマニズムとは何か、その本来のありかたはいかなるものか、という問いかけに導かれた探究もあってよいであろう。いなむしろ、このような問いかけとともに、じつは、真に批判的なヒューマニズム研究の可能性もひらかれてくるのではあるまいか。そのときはじめて、歴史的現象としてのルネサンス・ヒューマニズムの諸形態は、その豊かな積極的可能性とともに、多かれ少なかれそのいびつさや不充分性をも私たちのまえに露呈してくるであろう。すなわち、真のフマニタスに不可欠なあの根底的調和の破れや質的不充分性をも露呈してくるであろう。こうして、ヒューマニズムについての歴史的研究は、同時にまた、私たちの現在のな<ヒューマニズム>の新しい可能性を問う切実な探究の一環ともなりうるであろう。

なお、ルネサンス・ヒューマニズムと他の諸<ヒューマニズム>との関係については、私はまったく触れなかった。が、ルネサンス・ヒューマニズムについて私のおこなった簡単な形式的規定は、それ自体すでに、ルネサンス・ヒューマニズムと

他の諸〈ヒューマニズム〉との比較論的考察にも、いくらかの基本的手がかりを与えうるのではないかと思う。

提題 ペトラルカとクザーヌスにおけるヒューマニズム

大 出 哲

Nicolaus Cusanus (1401—1464) は、1416年にハイデルベルク大学の学籍登録をしたが、1年足らずでパドヴァに赴く。そこで doctor decretorum の学位を取得したのち、1425年春にはケルン大学の学籍登録をする。当時、ローマ教皇庁は、古典文学の熱愛に燃えはじめていた。この火は燃えさかかって、人文主義者 Tommaso Parentucelli と Enea Silvio Piccolomini を教皇位に挙げるに至る。こうした状況下でクザーヌスは、ケルンにおいて、イタリア人文主義者のために写本収集家として熱心に働き、ラテンの古典作家のおびただしい写本を発見して彼らに貢献した。にもかかわらず、クザーヌスは、パーセル公会議参加 (1432年2月29日) の頃から次第に彼らから忘れ去られてしまう。Pomponazzi, Ficino, Pico の著作には、クザーヌスの名は見当たらない。しかし、後世は彼を「ドイツ・ヒューマニズムの代表者」(E. Vansteenberghe), あるいは、「キリスト教的ヒューマニズムの当時の最大の代表者」(E. Bohnenstätt) と呼んでいる。ここから、「クザーヌスはイタリア人文主義者と袂を分かって異質なヒューマニズムを打ち立てたのだ」という命題が推測される。この命題を検証するために提題者は、「すべての人文主義者の真の原型」(M. Seidlmayer) と呼ばれている Francesco Petrarca (1304—1374) をイタリア人文主義の代表者として引き合いに出したい。というのは、彼とクザーヌスとの関わりの深さは、G. Santinello の文献学的業績によって確認されるからである。彼によれば、Bernkastel-Kues の聖ニコラウス養老院の図書室に所蔵されているペトラルカ写本—De vita solitaria (Codex Cusanus 53, fol. 172^r—222^r); De remediis utriusque fortunae (Cod. Cus. 198, fol. 1^r—157^v; Cod. Cus. 199, fol. 1^r—170^v); Rerum memorandarum libri (Cod. Cus. 200, fol. 1^r—96^v); De secreto